

蠡管算法

全



別
分





九州帝國大學理學部

7418

物理學教室

九州帝國大學工科大学

令

803732

大正 9 年 10 月 26 日

數學物理學教室

理学部 和 邇及

022132002017552



九州大学蔵書







我帝國往古より、算道を支那に求め世々學者の出るあり
と雖も、其由來する所、詳かなる史籍なし、之れを二三
の國史に徴して臆測するのみ、故に本朝數學を唱ふる者
は、慶長元和偃武の後、昌平の餘光、毛利重能氏出て、
歸除の法を著し、算道を傳播せしを濫觴とす、寛永年間、
其門吉田光由氏、新編塵劫記三卷を出版し、世に公にす、
之を以て世人が算道の有益なるを知り、其門に教を乞ふ
者少なからず、當時算法統宗、算學啓蒙等の書、我國に
渡り、算法に志す者、大に研究の端緒を得たるものの如
し、寛永より延寶の間、東都に關孝和先生出て、卓然傑

出の才を以て、茲に本朝數學に一機軸を出す、當時數理に従事するの輩、算聖と仰ぎ、教を乞ふ者少なからず、荒木村英、建部賢弘の二氏、其高弟として、傳を繼ぐ、荒木氏は、松永良弼氏に傳へ、建部氏は中根元圭氏に傳ふ、松永氏、關先生の遺稿を校讎して、其傳統を明かにし、是より關流と稱す、別傳を授與したる者を、宗統と曰ひ、印可を免したる者を正統と唱ふ、本邦數理を研究する者、大概關流に賴る、斯の如くなる數年にして、此門に出る者多し、就中寛政文化年間、上野國板鼻驛の遊士に、小野榮重氏あり、業を藤田貞資氏に受け、其傳を

得て門人を教授す、信毛の學者氏に師事し、斯學に有力なる者尠なからず、劔持章行、齋藤宜長、巖井重遠等世に知られたり、齊藤宜長氏は、其足らざるを補はんが爲め、東都に來り、坂部廣胖氏に學び、傳統を得て其子齊藤宜義氏に傳ふ、宜義亦勉學にして、學力父に劣らず、殊に圓理に通ず、通稱を長次郎と云ひ、字は算象、逐菴と號す、上野國群馬郡板井村に住す、門下頗る多くして、有力者少なからず、就中其傳統を受けたる、萩原禎助氏の如き、傑出の學力有る者は實に本朝數學上の名譽とす、茲に聊か氏の傳記を述んと欲す、

萩原氏其先は新田義貞に出て、其後胤萩原衛門氏民間に降り、其の孫某上野國勢多郡關根の邑に住す、數代連綿として系統を繼ぎ、友吉氏に至る、禎助氏は其の嗣子たり、氏名は信芳、禎助は通稱、字は德郷、湖山と號す、文政十一年四月八日、上野國勢多郡南橋村大字關根に生る、天保七年より五年間同村小泉鐘豊に師事して、普通學及び習字を學び、同十一年より五年間、同村養田鮮齊に師事し、八算見一より、開平方開立方に至る迄算術を修學す、弘化三年より五年間、同國勢多郡上小出村、藍澤無滿に就き和漢學を修業せり、農業を以て家職とし、

幼にして父の跡を嗣ぎ、専ら農業に日を消す、故に晝間は家業の多事なる爲に、夜間を以て勉學せりと云ふ、嘉永四年より同國群馬郡板井村なる、齊藤宜義氏に従ひ、數學を研究す、家業の暇、師家を訪ふに行程四里餘、夜行して朝に至り師家を敲き、業を終れば、直ちに歸りて家業を執れりと云ふ、其熱心勉勵の結果、終に圓理の蘊奥を極め、算法方圓鑒(文久二年出版)を世に公にす、自問自答卅五題、之を分つて原題、極題、作題、截題、畫題、削題、穿題、貫題、交題、張題、撓題、捻題、廻題、鉤題、垂題、照題、盡題、轉題とす、次いで算法圓理私論(慶

應二年出版)を著す、此時に當りて氏は余が茅屋を訪はる、爾來交通し、共に數理を談じ、友とし善し、後圓理算要(明治十一年出版)を著すや、余に校訂出版の事を依頼せらる、此書は實に本朝數學家が圓理豁術に力を盡したる、最終の著と稱す可きものなり、

氏は家事を嗣子に任せ、明治十年十二月二十日、群馬縣小學訓導に擧げられ、同十一年四月十日、同縣師範學校教師となる、校は前橋にあり、自宅より二里を徒歩して通勤せりと云ふ、同十四年十一月一日、職を辭し之れより倍々數學の研究に勉む、同年同月東京帝國大學理科大

學に出勤を命ぜられ、本朝數學書の取調を成す、同十七年五月解かれて歸國す、それより數學研究の傍、俳偈を嗜み、亦蠶業に熱心す、明治四十二年十一月二十八日、病を以て自宅に長逝せらる、行年八十二歳、

本書は氏が三十年來の研究に係り、普く本朝數學書の問題を解義し、自己の術と合せざるものは、再三再四考訂して後誤を見出し、邪術を正し、過乘を省き、術文を簡易にする等、其苦心學を同ふせざるものの窺知すべきに非ず、且つ本邦出版の數學書に博覽なると、長生なるとに因りて、稿を全ふせらる、明治三十七年稿成り、余に

校訂出版の事を囑せらる、依りて、之を或印刷者に託し、
剞劂に附せしに、偶々、其功を終りしも、印刷者の不注
意にして、印本を亡失し、それが爲め世に公にする能は
ず、曠日彌久、氏の存生中出版せざりしは遺憾此上なし、
然るに長澤龜之助氏の盡力に依りて本書の印刷成る、今
や發刊に際し、萩原氏の略傳を記し、江湖に照會し、且
出版遅延の理由を述べて、序に代ふ

明治四十三年八月

關流正統七傳

川北朝鄰識

本書卷首に掲げたる萩原氏の小照は數年前氏上京のとき撮影せられしものに係る

蠡管算法卷之上書目

竿頭算法	元文三戊午年	中根保之丞彥循 著
開承算法	寛保三癸亥年	池部良齋清眞鑒定
算髓	延享二乙丑年	山本武兵衛格安 撰
拾璣算法	明和三丙戌年	豐田光文景 著
精要算法	安永八己亥年	藤田權平定資 著
算法學海	天明元辛丑年	坂新藏正永 編
神壁算法	寛政元己酉年	藤田門彌嘉言 編
算學小筌	寛政六甲寅年	牛島宇平太盛庸 著
算法古今通覽	寛政七乙卯年	會田算左衛門安明 編

再訂算法 寛政九丁巳年

藤田門彌嘉言 著

不朽算法 寛政十一己未年

安島萬藏直圓 遺稿

續神壁算法 文化三丙寅年

藤田門彌嘉言 編

算法點竄指南錄 文化七庚午年

坂部勇左衛門廣胖著

算法點竄指南 文化七庚午年

大原勝右衛門利明閱

算學鉤致 文化十癸酉年

石黑藤右衛門信由著

五明算法前集 文化十一甲戌年

家崎彥太郎善之 著

弧矢弦叩底 文政元戊寅年

權律師忍澄 撰

階梯算法 文政元戊寅年

武田篤之進之孚 編

續算學小筌 文政六癸未年

牛島宇平太盛庸 編

算法便覽 文政七甲申年

武田篤之進眞元 著

社盟算譜 文政九丙戌年

白石八藏長忠 編

五明算法後集 文政九丙戌年

家崎彥太郎善之 著

溫知算叢 文政十一戊子年

木村定次郎尙壽 著

要妙算法 文政十二己丑年

堀池六太夫久道 編

算法新書 文政十三庚寅年

千葉雄七胤秀 編

算法雜俎 文政十三庚寅年

巖井右内重遠 編

祠刹匾揭算法 文政十三庚寅年

馬場小太郎正統 編

大全塵劫記 天保三壬辰年

山本安之進嘉前 編

古今算鑑 天保三壬辰年

内田彌太郎恭 編

算法側圓詳解	天保四癸巳年	村田佐十郎恆光	編
算法圓理鑑	天保五甲午年	齋藤長次郎宜義	著
算法瑚璉	天保七丙申年	小林茂吉忠良	著
合類算法	天保七丙申年	市川玉五郎行英	編
揭楣算法	天保七丙申年	堀池六太夫久道	編
算法圓理氷釋	天保八丁酉年	畠井右内重遠	閱
豁機算法	天保八丁酉年	志野庄之助知郷	編
算法直術正解	天保十一庚子年	平内大隅廷臣	編
算法淺問抄	天保十一庚子年	御粥猪之助安本	編
探蹟算法	天保十一庚子年	劍持要七章行	著

算法圓理新々	天保十一庚子年	齋藤長次郎宜義	著
照闇算法	天保十二辛丑年	榎豐後法眼淨門	編
算法點竄手引艸	天保十二辛丑年	大村金吾一秀	編
算法橢圓解	天保十三壬寅年	村田佐十郎恆光	閱
眞元算法	天保十五甲辰年	武田主計正眞元	閱
當世改算記	弘化四丁未年	金子左右平昌良	編
順天堂算譜	弘化四丁未年	福田理軒	總理
算法開蘊	嘉永元戊申年	劍持要七章行	著
頓成算錄	嘉永六癸丑年	松峯覺珙典	著
當用算法	嘉永六癸丑年	佐久間次郎太郎續	著

啓迪算法 安政二乙卯年

小野光右衛門以正編

數理神篇 萬延元庚申年

齋藤長次郎宜義 閱

筆算通書入門 明治九年

福田半編

數學會社雜誌 明治十年

大村金吾一秀編

明治小學塵劫記 明治十一年

福田理軒編

測量全書附錄 明治十三年

中曾根愼吾宗郝 閱

探索算法 明治十五年

千葉量七常一編

蠡管算法卷之下書目

算法求積通考 弘化元甲辰年

內田半吾久命編

算法整數起源抄 弘化二乙巳年

菊池宇太之丞長良 閱

算法圓理通 弘化二乙巳年

藤岡雄市有貞著

算法圓理三台 弘化三丙午年

佐藤虎三郎解記 閱

順天堂算譜 弘化四丁未年

福田理軒總理

當世改算記 弘化四丁未年

金子左右平昌良編

算法開蘊 嘉永元戊申年

劍持要七章行著

算法圓理括發 嘉永四辛亥年

竹內藤左衛門修敬著

算法圓理括囊 嘉永五壬子年

加悅傳一郎俊興著

頓成算錄 嘉永六癸丑年

松峯覺珙典著

啓迪算法 安政二乙卯年

小野光右衛門以正編

算法尖圓豁通 安政二乙卯年

桑本才次郎正明著